

令和5年度〔自己評価報告書〕

学校番号	学校名	校長名
35	川崎市立平間小学校	佐川 昌広

学校教育目標	今年度の重点目標
平間小の子どもがどこにいても楽しく生き生きとすごすため、自立と共生をめざし平間プライドを育み、未来を創る	①SDGsアクションを目指す生活科・総合的な学習の時間の研究 ②ホールスクールアプローチで展開するユネスコスクール ③マルチステークホルダーの支えで推進する80周年記念事業

評価項目	具体的な取組	成果と課題	具体的な改善策
1 毎日の生活を楽しく生き生きとすごしている。	全教育活動を通して、子ども達の主体性を引き出し、子ども達の思いや発想を大切にしながら自分達で創り上げる楽しさを感じられるようにする。	「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の合計は78%の児童、94%の保護者が回答している。昨年度と比較すると、保護者の割合は7%増、児童の割合は7%減になった。保護者への情宣が効果的だった。児童については、「わからない」も増加している点から、「生き生きとすごす」の表現について言葉の意味を再確認する必要があると考える。	引き続き指導力・授業力・学級経営力の向上に努め、信頼される学校を目指すとともに、子ども達が生き生きと活動する場面を保護者の方に見てもらえるように、授業参観など積極的に呼びかけていく。
2 SDGsのことを考えながら生活している。	学校生活のあらゆる場面で、子ども達がSDGsの目標と関連付けて考えるように促したり、委員会活動などSDGsアクションにつながる活動を推進する。	「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の合計は75%の児童、79%の保護者が回答している。昨年度と比較するとどちらも減少している。児童は学校生活の中でSDGsアクションに取り組んでいるはずなのに1割の児童が否定的な回答をしていることから、子ども達の活動に対する教員の価値付けに不十分な点があると考えられる。	引き続き、学校生活のあらゆる場面でSDGsの視点で考え、活動できるように促していくとともに、学校内に留まらず、地域・社会に向けたSDGsアクションを目指した活動を推進していく。
3 地域の方やPTAの方などたくさんの方々に支えられていることを実感している	コミュニティ・スクールの活動やPTA活動、地域の方との関わりについて、学校だよりを中心に活動の様子を伝える。	「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の合計は92%の児童、79%の保護者が回答している。この点について保護者の方に理解を得ることが課題だったが、昨年度と比較して4%増加させることができた。手紙やメール等で積極的に情宣してきた成果だと考える。	引き続き、保護者に向けて手紙での情宣に務める。また、地域の方とともに活動する場面を参観してもらえるように保護者に積極的に呼びかける。
4 周りのことを考えながら、きまりを守って生活しようとしている	「平間スタンダード」にのっとり、全教員が共通の視点で児童指導にあたると共に、SDGsの視点で広く考え、自分も相手も大切にできるように促していく。また、学校の中だけではなく日常生活に反映されるよう指導する。	「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の合計は86%の児童、93%の保護者が回答している。昨年度と比較すると両者とも増加している。このことから、あらゆる学習活動において、児童同士の協働や地域の方々との関わりを積極的に取り入れた成果だと考えられる。	引き続き、子ども達同士の協働や地域の方々との関わりをあらゆる学習活動に積極的に取り入れると共に、SDGsの視点で広く考え、自分も相手も大切にできるように促していく。落ちているものを自分から拾ったり、省エネに進んで取り組んだりするなど、日常生活に反映されるよう指導していく。
5 自分でできることを自分から進んで取り組もうとしている	係活動や委員会活動などの特別活動において、児童が自分で考え、自ら行動し創造的に活動する姿を目指して全教員が共通理解したうえで指導する。	「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の合計は81%の児童、84%の保護者が回答している。昨年度と比較すると両者とも3%増加している。児童の創造的な活動が増えてきたこと、そのことを全教員が目指す姿として捉え、指導にあたった成果だと考える。	あらゆる学習活動の中で児童が自分で考え、自ら行動し創造的に活動する姿を目指す姿として全教員で捉え、一丸となり今後も継続して指導していく。また、児童にも同様に目指す姿を共有し、意識して活動できるように促す。
6 地域のよさを感じている	平間商店街や多摩川等、平間の地域を授業で扱うことにより身近にある魅力に気づき、地元愛を育むとともに、児童が自分達の活動を発信する活動を推進する。	児童の回答は昨年度と変わらず、9割の子ども達は日々の学習や生活の中で地域のよさを感じているようだ。また、保護者の回答については、「わからない」「思わない」の割合が昨年度に比べて減ったことも成果だと思う。	引き続き、地域の学習材や地域の方々との関わりを授業の中に取り入れると共に、地域に向けて活動したり自分達の活動を地域にむけて発信したりする活動を推進する。今後も地域の中で積極的に活動する子ども達の姿をたくさん保護者の方に見てもらえるように情宣に努める。
7 自分のよさを感じたり、自分のよさを伸ばそうと挑戦したりしている	学習活動のふり返りを積極的に行ったり、交流したりする。また、学校生活のあらゆる場面において、児童の活躍の場を多く設定したり、児童の主体的で創造的な活動を推進したりすることで、児童同士が認め合える環境を整える。	「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の回答について、昨年度と比較すると保護者は3%増加しているのに対し、児童は変化がない。SDGsアクションとして地域に向けて発信したり、児童の主体的で創造的な活動が見られたりする中で、育みたい自己肯定感の成果が不十分に感じる。	引き続き、学習のあらゆる場面で、児童に目標を設定させてから活動を進めたり、自己の変容に目を向けてふり返ったりしながら、児童の自己肯定感を高めていけるように支援する。また、失敗を恐れず何事にも挑戦していける雰囲気や学校全体に広げ、児童同士が認め合える環境を児童と共に創っていく。
8 生活科・総合的な学習の時間に意欲的に取り組んでいる	生活科・総合的な学習の時間の授業研究に取り組み、子ども達が主体的に課題を解決していけるように単元の流れを計画する。	「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の合計は85%の児童、81%の保護者が回答している。昨年度と比較すると児童は1%、保護者は4%減少し、その分「わからない」が増加している。研究授業の際に参観を呼び掛けたり、学習成果を外務で発表する際には引率を呼び掛けたりしているが、結果から考えるとまだ課題があると考える。	今後も継続して、生活科・総合的な学習の時間の授業研究に取り組み、子ども達が本気になって主体的に課題を解決していけるように単元の流れを計画したり、指導方法を考えたりしていく。また、授業参観も引き続き積極的に呼びかけていくと共に、学習活動を展開する中で、家庭と連携した取り組みについて考えていく。

学校関係者の評価	学校運営のまとめ
○今年度は特に人員不足で大変そうだった。よりよい学校づくりに教職員の増員をお願いしたい。 ○コミュニティ・スクールで創り上げた80周年記念式典がとてもよかった。SDGsを軸に、子ども達、教職員、保護者、地域住人それぞれが協力して開催できてよかった。 ○コミュニティ・スクールであるメリットを生かして、教育課程の中で学校と地域が深くつながり継続的に交流していけるように協力していきたい。	○生活科・総合的な学習の時間の研究を始めて5年目になり、児童が主体的に課題解決していけるような単元づくりについて教員の理解も深まってきたように感じる。また、児童の主体性や児童による創造的な活動の大切さについて共通理解できてきたように感じる。今年度は80周年記念式典もあり、実行委員会を中心に児童の思いやアイデアを吸い上げ、児童中心の記念式典を創り上げることができた。次年度も、子ども達の主体的で創造的な活動を引き出す支援を大切にしていけると共に、生活・総合に限らず、あらゆる教育活動においても課題解決的な学習が展開できるようにする。 ○学校全体でSDGsに取り組む始めてから5年目となり、今年度は教育課題の推進校として研究に取り組んできた。研究・児童支援・ESDの3部会に分かれそれぞれの角度から学校生活におけるSDGs達成に向けた取り組みを考え、実践することができたことが成果と言える。 ○昨年度に引き続き、経営方針・教育課程・指導計画・学校評価等を点検してESDを推進するカリキュラム作りを実践する。その際、教科横断を意識してカリキュラムデザインしていくことを大切にす。